［書評］

聖刻文字版『ピーターラビットのおはなし』

Beatrix Potter. *The Tale of Peter Rabbit*. Hieroglyph Edition. Translated by Nunn, John F., Parkinson, Richard B. London: British Museum Press. 2005. 70 pp. ISBN 0-7141-1969-5.

永井正勝

1. はじめに

「マグレガーのとこの はたけにだけは いっちゃいけませんよ」というお母さんのいいつけを無視してはたけに行ったピーターは、苦渋の末、命からがらねぐらに戻る。この有名な物語『ピーターラビットのおはなし』[1]の聖刻文字（ヒエログリフ）版がイギリスで出版された。本稿の目的はこの聖刻文字版の内容を紹介することにあるが、本題に入る前に、ビアトリクス・ポターの生い立ちとピーターラビットの誕生、そして『ピーターラビットのおはなし』の各版と挿絵の関係について確認しておきたい。

2. ビアトリクス・ポターの生い立ちとピーターラビットの誕生

原作の著者ビアトリクス・ポター（Beatrix Potter）は1866年ロンドン市内で生まれた。絵を愛好する父親に影響されて、ポター少女もはやくから絵画に関心を持っており、昆虫、動物、植物など自然を題材とした絵を数多く残している（レイン 1986：34-36）。1892 年からはチャールズ・マッキントッシュ（Charles McIntosh）の指南のもとキノコの研究に精力的に取り組み、数

[1] 冒頭に引用したのは『ピターラビットのおはなし』の「いしいももこ」訳（ポーター 1971：6）であり、本稿では以下においても、いしいももこ訳を適宜引用させて頂くことにする。

多くの細密なスケッチを残した（吉田 2002：24）。しかも、キノコ研究の成果は1897年に論文へと結実されたように、卓越したものだった。自然を愛するポターは地中に埋蔵されている化石や遺物にも関心を持ち、それらの詳細なスケッチを作成してもいる（Taylor et.al 1987：92-94）。またポターは自ら絵を描くばかりか、有名な画家の絵画を評している。特にラフェエル前派に属するジョン・エヴァレット・ミレイ（John Everett Millais）の絵画には並々ならぬ関心があったようで、ポターが15歳～30歳（1881～1897年）のときに暗号文字で綴った日記[2]にミレイの名が度々登場する（村松 2002：37-38）。このようにポターが絵画と自然に関心を抱いていたころ、知り合いのノエル・ムーア（Noel Moore）少年に、病気見舞いとしてポターは絵手紙[3]を贈った（1893年9月4日）。この手紙の冒頭には「Dear Noer. I don't know what to write to you, so I shall tell you a story about four litter rabbits（親愛なるノエル君へ。何を書いたらよいのかわからないので、私はあなたに4匹の小さなウサギの話をいたしましょう）」という文とともに、4匹のウサギの線画が添えられている。これが「ピーターラビットのおはなし」の原形であり、この挿絵に動物が描かれているのは、彼女の関心を考えてみれば納得のいくところである。

その後ポターは、この手紙に加筆・訂正を加え、出版の準備を整えた。しかしながら出版を引き受けてくれる会社がみつからず、1901年12月16日に自費で出版することになる。ここにはカラーの口絵が1枚と、墨線の挿絵が45枚含まれていた。ポターは当初250部を用意したが、この自費出版本はすぐに完売してしまい、1902年2月2日に200部を追加出版するに至る。このような自費出版本の好調をみて、出版依頼を断っていたフレデリック・ウォーン社（Frederick Warne & Co.）が態度を変え、絵をすべてカラーにするとともに挿絵を30枚に減らして、1902年10月に商業版の初版を出版した[4]。こ

---

[2] 暗号日記はレズリー・リンダー（Leslie Linder）によって解読され、1966年に日記の英訳がリンダーによって出版された。だが、そのリンダー訳には出版の事情から日記本文に削除が認められるという（吉田 1994：33-35）。その後、削除された部分を補った訳がジュディ・テイラー（Judy Taylor）によって出版（Taylor 1989）されるとともに、テイラーの序文を付したリンダーの新訳（Linder 1989）も出版された。

[3] 絵手紙のファクシミリはTaylor（1987：10-11）に掲載されている。

[4] 出版を巡る様子に関しては、Linder（1987：92-110）、吉田（1994：76-78）、横田（2004：

の商業版の初版も好評で、翌11月に第2版が、そして12月には第3版が印刷された。

3.『ピーターラビットのおはなし』の各版と挿絵

絵手紙、自費出版本、商業版と続いた『ピーターラビットのおはなし』は、それぞれの版で文書の内容や挿絵の種類が異なっている。そのうち挿絵の違いはフレデリック・ウォーン社から出版されたものにもみられる。そのような違いのなかで最大のものは第5版（1903年10月）で行われた挿絵の改定であろう。ここにおいて、有名な「マグレガーおばさんとパイ」の絵を含めた4点の挿絵が削除されたのであり[5]、その後、英語版はもとより1971年の日本語訳（ポター 1971）でもそれらの挿絵が削除されている。

ところが、初版の刊行から100周年を記念した新装版（Potter 2002）において、それまで削除されていた4点の挿絵が戻されるとともに、新たに2点の挿絵が追加された。復活した4点の挿絵は新装版（Potter 2002）の pp. 10, 18, 49, 62 であり、また新たに追加された挿絵は pp. 33, 55 である。日本でも100周年を記念して新装版（ポター 2002）が出版されたが、そこでは挿絵の色合いを美しくするための措置がとられたものの、残念ながら挿絵の増補は行われなかった。

3-4）を参照。

[5] 「マグレガーおばさんとパイ」の挿絵は絵手紙の段階には含まれていなかったが、自費出版本において「YOUR Father had an accident there; he was put in a pie by Mrs. McGregor（おまえたちの おとうさんは、あそこで じこにあって、マグレガーさんのおくさんに にくのパイにされてしまったんです）」という本文とともに用いられた（自費出版本のファクシミリは Taylor 1987:38 に掲載されている）。ポターはこの自費出版本の絵をもとにして、フレデリック・ウォーン社用にカラーの挿絵を用意したが、マグレガーおばさんの顔が怖いという理由でフレデリック・ウォーン社から却下された。そのため、ポターはマグレガーおばさんの顔を若い女性に改めるなどの訂正を施した絵を書き直し、これが初版に採用された（却下された挿絵と訂正された挿絵は Taylor et.al. 1987 : 101 に掲載されている）。しかし、この絵を含めた4点が第5版で削除されてしまったのである（Linder 1987 : 422）。

4. 聖刻文字版『ピーターラビットのおはなし』について

4.1. 概要

エジプト文明を築いた人々の言語はエジプト語(あるいは古代エジプト語)と呼ばれる。この言語は紀元前3100年頃には文字化され、紀元後16世紀ごろまでエジプトの地で使用されていた。現在では死滅した状況にあるが、コプト=キリスト教会の典礼では、コプト=エジプト語と呼ばれる段階のエジプト語が部分的に用いられている。エジプト語を記すために使用された文字には、おおまかにいって聖刻文字(ヒエログリフとも呼ばれる)、神官文字(ヒエラティックとも呼ばれる)、民衆文字(デモティックとも呼ばれる)、コプト文字(ギリシャ文字を基盤)があった(永井 2002a : 2-3)。本稿で紹介する聖刻文字版の『ピーターラビットのおはなし』(Potter 2005)は、正確にいえば聖刻文字で記されたエジプト語訳の『ピーターラビットのおはなし』のことである。

訳者はジョン・F・ナン(John F. Nunn)とリチャード・B・パーキンソン(Richard B. Parkinson)の2人である。ナンの専門は古代エジプトの医学であるが、長年に渡りエジプト語の研究にも取り組んでいるという。またパーキンソンの専門は古代エジプト語の文献研究であり、その分野に関する著作も多い。訳者はイギリスを代表するエジプト語研究者であるといえるであろう。

この聖刻文字版の底本は2002年の新装版(Potter 2002)である。すでに述べたように2002年版は100周年を記念した挿絵増補版であり、したがってこれを底本とした聖刻文字版も挿絵増補版となっている。しかも、挿絵のページ番号は2002年の英語版と同一であり、英語版と対比させながら聖刻文字版を読むことができる。また、これはピーターラビット・シリーズの約束事として、聖刻文字版の本の大きさも小型版となっている[6]。

この聖刻文字版では、エジプト語訳を作成する際に『難破した水夫の物語』や『ウエストカー・パピルスの物語』などの中エジプト語と呼ばれる段階の

---

[6] イギリス絵本史におけるピーターラビットシリーズの小型本の位置づけについては三宅(1994 : 95-107)を参照。

文学作品を参照したという。これらの作品は中エジプト語の文学作品の代表であり、訳者たちの判断はきわめて至当なものだといえる。

とはいうものの、19-20 世紀のイギリスと古代エジプトとでは、動植物、食物、道具などの様々な点で相違がみられる。翻訳にあたってはこのような点が問題となっている。たとえば原作（Potter 2002：7）に登場するカトンテイル（Cotton-tail）という名前に含まれる「絹（cotton）」は、古代エジプトには存在していなかった。このような場合、訳者たちは古代エジプトに存在したもので代用させている。つまり、絹の場合は「リネン（linen）」が代用され、ウサギの名前がリネンテイル（Linen-tail）に改められているのである。聖刻文字はその字節形成においては象形が多用されているが、実際の用法では六書でいうところの仮借、すなわち表音が多い（永井 2004；2005a）。したがって、万葉仮名の音仮名のように、固有名詞であるカトンテイルを聖刻文字の表音文字で表記することも十分に可能であった。だが、訳者たちは古代エジプトに実際に存在する単語を使用して訳を作成するという方針を原則としている[7]。固有名詞の読み方を改めるという点で、現代の我々は違和感を覚えるかもしれないが、古代エジプト人がみた場合には逆に「エジプト語らしさ」を感じることであろう。

このように、聖刻文字版にはエジプト語らしさが漂っているのであり、訳出におおむね成功しているように思われる。ここでエジプト語らしさを醸し出している理由をまとめておくと、その第1は、うえで述べたように古代エジプトに実際に存在している単語を使用していることにある。そして第2は、小辞を巧みに含ませている点にある。エジプト語にみられる *ꜥf*[8]などの小辞は英語や日本語などの現代語に翻訳することが難しいものであるが、このような小辞を使用するによって、訳文にエジプト語らしさが増すことになる。そして第3は、2002年の英語版で「THE END」となっている物語の最後に、エジプト語の小説でみられるコロフォンを追加したことにある（Potter 2005：70）。コロフォンとはテキストが無事に模写されましたということを示

---

[7] だが、フロプシーやモプシーなど意味をとることが難しい語については、表音文字（＋限定符）で書かれている。

[8] なお、ラテン文字を基盤とした *ꜥf* などの表現はエジプト学で使用されている独自な転写記号である。本稿では以下においてもエジプト学式の転写記号を用いる。

す文言であり、中エジプト語の文学作品には原則としてこれが付される。

4.2. 学術的な課題

以上に述べたように聖刻文字版はおおむねその訳出に成功しているといえる。だが、学術的にみた場合、この翻訳には大きく2つの課題があるように思われる。1つめの課題は翻訳の精度である。ここでは、その例として2つを指摘しておきたい。1つは「自動詞の過去形」の表現である。中エジプト語の過去形では自動詞と他動詞で形態統語論が異なり、自動詞の場合は「主語＋動詞（状態形）」、他動詞の場合は「動詞＋接辞.*n*＋主語」となる（Polotsky 1965：24；Allen 2000：225；永井 2002a：81-83, 102-103）。しかしながら聖刻文字版では自動詞の過去形も「動詞＋接辞.*n*＋主語」となっているのである（1b）[9]。しかしながらこの部分は状態形を使用した（1c）の方が適切であるだろう[10]。

(1) p. 47

a PE ⌈ER sat down to rest.

b

ʿḥʿ.n *ḥms* *.n* *ptr*

そして 座る 接辞.*n* ピーターは

「そしてピーターは座りました」

c

ʿḥʿ.n *ptr* *ḥms.w*

そして ピーターは 座る（状態形-3人称・男・単）

「そしてピーターは座りました」

---

[9] 引用文の提示において例文番号の横に2002年の英語版と2005年の聖刻文字版のページを記している（両方ともページは同じ）。そしてaが英語版、bが聖刻文字版であり、cは本稿の筆者が考えた翻訳の改訂版である。なお、聖刻文字版には聖刻文字のみが記されており、転写記号や英語は添えられていないが、本稿のbとcではエジプト学式の転写記号、グロス、和訳を施しておいた。

[10] なお、自動詞を使用した*ʿḥʿ.n*構文が「*ʿḥʿ.n*＋主語＋自動詞（状態形）」となることはGardiner（1957：§478）でも指摘されている。

また、小辞 *m=k* の使い方にも若干の疑問が残る。この小辞は 2 人称に対する呼びかけで使用され、聞き手が男性単数の場合は *m=k*、女性単数の場合は *m=ṯ*、男女共通複数の場合は *m=ṯn* となる（Gardiner 1957 : 95)。2 人称に対する呼びかけという性格上、これらは会話文で使用される（永井 2003a : 53, 注(6))。訳出される表現はそれぞれの場面で異なるが、日本語の場合は「ほら」「さあ」「ごらん」「それでは」などとなる。英語では「Behold」「Lo」「Look」などの訳語が多い。このような *m=k* を聖刻文字版は次のように使用している（2b)。

(2) p. 12

a I am going out.

b

m=k *wi* *r* *pr.t*

それでは（2 人称・男・単） 私は 未来標識 行く

「それでは、私は行ってきますよ」

c

m=ṯn *wi* *r* *pr.t*

それでは（2 人称・共・複） 私は 未来標識 行く

「それでは、私は行ってきますよ」

(2) は p.8 の「Now, my dears（さあ、お前たち)」から続く母ウサギの言葉である。この表現にみられるように聞き手は複数（4 匹の子どもたち）であり、聖刻文字版においても「dears」は「*mrwty.w*（愛する者たち)」と複数形で訳されている。しかしながらそれに続く聖刻文字版の（2b）では、呼びかけの言葉が男性単数形の *m=k* となっており、これだとピーターのみに語りかけた言葉となる。この部分をピーターへの言葉として訳者が理解したのであれば *m=k* が適切な表現であるかもしれないが、しかしながら本稿の筆者としては、この部分を 4 匹の子どもたちに対する会話と捉え、(2c)のように *m=ṯn* を採用することを提案したい。

また、*m=k* は他にも pp.39, 43, 47, 48, 51, 59 (2 回), 64 で使用されているが、そのいずれもが地の文となっている。『ピーターラビットのおはなし』そのも

のが読者に語りかける調子で綴られているので、地の文に *m=k* が使用されているのも理解できないことではないが、中エジプト語の *m=k* が会話文で使用されるということと、英語版において会話文と地の文が形式のうえで明瞭に区別されていることとを考えあわせると、聖刻文字版における *m=k* の使用法には課題が残るといえるであろう。

以上に述べたことは翻訳の精度に関する課題であるが、聖刻文字版にはもう1つ別の課題が潜んでいる。それはエジプト学に蔓延している聖刻文字至上主義である。すでに述べたようにこの翻訳は中エジプト語と呼ばれる段階のエジプト語を基盤にしているが、この時代に使用されていた文字は聖刻文字と神官文字であった。聖刻文字は主に石に刻まれるときに使用される書体で、字形の1つ1つがはっきりとしている。それゆえ、この言語を知らない者がみても、「鳥の形をした字」であるとか、「人の形をした字」であるとかいうことがすぐにわかる。それに対して神官文字は日本の平安時代の平仮名のように筆記体であり、また複数の字節を連続して書く連綿体が頻繁に使用される。神官文字は聖刻文字の筆記体であるという位置づけになっているものの、実際には書体に関する特別な訓練を受けない限り神官文字を聖刻文字に翻字[11]することはできない。そもそも古代エジプトの書記は神官文字の学習を最初に開始したのであり、聖刻文字の習得は一部の限られたエリートのみに許された特権であった。また、聖刻文字と神官文字の違いは用途にもみられ、王室の公式碑文や墓に刻まれた宗教文書では聖刻文字が使用されていたが、手紙や文学作品は神官文字で書かれていた。

以上の状況を踏まえれば、漢字の筆記体に端を発する平仮名が現在では漢字と異なる体系を持つのと同様に、聖刻文字に端を発する神官文字も聖刻文字とは異なる文字体系であったと考えるのが妥当なものとなるであろう。しかしながら、現代のエジプト学者は神官文字を聖刻文字に翻字したうえで、

---

[11] キリル文字をラテン文字に置き換える場合のように、ある文字体系を他の記号体系に写し換えることを翻字（transliteration）と呼ぶ。それに対して言語の音を記号化したものは音写（transcription）と呼ばれる。翻字においてはもとの文字体系と翻字された記号体系との間に1対1の対応関係が求められるが、音写においてはそのかぎりではなく、たとえば英語の「knight」という文字表記の音写は/nait/となる。ただし、古くは本稿のいう翻字の意味で transcription という用語が使用されていたので注意が必要である。

それを資料として扱うことを好む。その結果、不幸なことに神官文字を読むことの出来ないエジプト学者が輩出されているのである。ではなぜ、神官文字をわざわざ聖刻文字に翻字するのであろうか。その最大の理由は、聖刻文字は文字の識別が容易であるという便宜的な事情にあるように思われる。これはつまり、手書きの筆記体は読み難く、書体を覚えるのに時間がかかるので、わかり易い聖刻文字で代用しておこうという甘えである。いうまでもなく、この状況はエジプト学で古文書学が熟していないことを意味する[12]。そしてもう 1 つの理由は、「古代エジプト文明の文字＝聖刻文字（ヒエログリフ)」というイメージが、一般の人々ばかりか学者の中にもみられることにある。しかしながら、聖刻文字を神官文字に翻字するという作業は、平仮名をそのもととなった漢字に改めるようなもので、そのように改められた資料は、原典とは呼べないということに留意すべきであろう[13]。

ここで聖刻文字版『ピーターラビットのおはなし』に話を戻すと、ここにも聖刻文字至上主義が見受けられる。なぜなら、古代エジプトの文学作品はすべて神官文字で書かれているからである。しかも神官文字の場合、文字は右縦書きあるいは右横書きとなり、左書きは存在していないのであり、また

---

[12] とはいうものの、この状況は今後改められていくものと思われる。それを示唆するものの 1 つがハートヴィッヒ・アルテンミューラー（Hartwig Altenmüller）によるエジプト語の入門書である（Altenmüller 2005)。この本は一般書でありながらも、テキストのジャンルと文字の種類の対応表を示すとともに（p. 20)、神官文字の読み物の 1 つ 1 つに対して神官文字のテキストと聖刻文字への翻字を掲載しているのである（pp. 165-170)。今後はアルテンミューラーのように、神官文字で表記された資料には神官文字の原典を付すことが必要となるであろう。

[13] 「難破した水夫の物語」と呼ばれる文学作品はパピルスに神官文字で記されている。この物語の翻訳を提示したジョン・フォスター（John L. Foster）の著作（Foster 1998）には聖刻文字に改められたテキストが添付されているが、聖刻文字テキストに対してフォスターは「the original hieroglyphic text」（p.4）という表現と「transcription」（p.10）という表現を用いている。この transcription は古い使い方であり、これは本稿でいう翻字に相当する。だが、問題なのは前者の「the original hieroglyphic text」という表現である。というのも、「難破した水夫の物語」の原典（original text）は神官文字で書かれているからである。このフォスターの表現に表れているように、エジプト学においては聖刻文字への翻字が「原典」として扱われているのだが、筆者はこのような状態を聖刻文字至上主義と呼んでいる。

聖刻文字においても、その規範となる書字方向は右書きであったのだが[14]、聖刻文字版『ピーターラビットのおはなし』は左横書きの聖刻文字になっているのである。

とはいうものの、聖刻文字版『ピーターラビットのおはなし』は英国人の洒落によって作られたものであり、英国人の心性では納得のいく作品ではないのかという指摘があるかもしれない。筆者はそのような指摘に異を唱えるつもりはないが、しかしながら、古代エジプト人が聖刻文字版をみたときにどのように感じるのか、ということを考慮することも必要だと考えている。

5. おわりに

言語は大きく音声言語と文字言語とに分かれる。このうち音声言語の場合は、実際の使用において身振り手振りなどの身体動作を伴う。それに対して文字言語の場合、一見すると身体動作は表記されない。しかしながら文字言語の場合も、実際の使用状況を注意深く眺めてみれば、文字言語が人物などの絵とセットになっている状況を見出すことができる。その代表は、現在では絵本や漫画や各種の標識というメディアであり、以前は絵巻物というメディアであった。これらのメディアにおいては、「絵と文の出会いや，絵と文とがとけあうおもしろさから，絵だけでは味わえない世界，文だけでは生じえない世界」（三宅 1995 : 50）が醸し出されている。『ピーターラビットのおはなし』はそのような例の典型だといえるが[15]、古代エジプトの神殿壁画や「死者の書」などの絵巻物も同様なメディアであったのであり、そこでは聖刻文字が絵とともに用いられていた[16]。このような観点からみれば、聖刻文字版『ピーターラビットのおはなし』の出版は、ピーターラビット・シリーズの翻訳に新たな版が加わったということだけではなく、文字と絵の関係を見直す契機にもなっているといえるのではないだろうか。

---

[14] なお聖刻文字の書字方向の規範が右書きであることについては永井（2005b）を参照。

[15] なお、ピーターラビットの挿絵を図像学の立場から観察し、そこにキリストの受難を読み取る試みとして益田（1997）がある。

[16] 古代エジプトの壁画における文字と絵の関係については永井（2002b ; 2003b）を参照。

【参照文献】

Allen, James P. (2000) *Middle Egyptian: An introduction to the language and culture of hieroglyphs*. Cambridge: Cambridge University Press.

Altenmüller, Hartwig (2005) *Einführung in die Hieroglyphenschrift*. Hamburg: Helmut Buske Verlag.

Foster, John L. (1998) *Shipwrecked sailor: A tale from ancient Egypt*. Cairo: The American University in Cairo Press.

Gardiner, Alan (1957) *Egyptian grammar: Being an introduction to the study of hieroglyphs*. Oxford: Griffith Institute.

レイン, マーガレット (1986)『ビアトリクス・ポターの生涯：ピーターラビットを生んだ魔法の歳月』(猪熊葉子訳) 福音館書店.

Linder, Leslie (1987) *A history of the writings of Beatrix Potter: Including unpublished work*. London: Frederick Warne.

———— (1989) *The journal of Beatrix Potter*. New edition. London: Frederick Warne.

益田朋幸 (1997)『ピーターラビットの謎：キリスト教図像学への招待』東京書籍.

松村和明 (2002)「ピーターラビットの不思議：その魅力の秘密」『美術の窓』21/11 (233): 34-41. 生活の友社.

三宅興子 (1994)『イギリス絵本論』翰林書房.

———— (1995)『イギリスの絵本の歴史』岩崎美術社.

永井正勝 (2002a)『必携 入門ヒエログリフ』アケト.

———— (2002b)「壁面装飾」早稲田大学エジプト学研究所 (編)『ルクソール西側岩窟墓〔I〕』39-69. 早稲田大学エジプト学研究所.

———— (2003a)「中エジプト語の *m=k* 構文の統語構造」『オリエント』46/1: 40-56. 日本オリエント学会.

———— (2003b)「壁面装飾と碑文」早稲田大学エジプト学研究所 (編)『ルクソール西側岩窟墓〔II〕』33-60. Akhet Press.

———— (2004)「象形文字の表音性：ヒエログリフ解読の鍵」『筑波大学附属図書館展 オリエントの歴史と文化：古代学の形成と展開』45-46. 筑波大学附属図書館.

――― (2005a)「ピラミッド・テキストにおけるエジプト聖刻文字の表記法：語の表記法と文字の用法の分析」『西南アジア研究』63: 41-53. 西南アジア研究会.

――― (2005b)「古代エジプト聖刻文字の書字方向：一般統字論構築の一助として」『一般言語学論叢』8: 21-45. 筑波一般言語学研究会.

Polotsky, Hans Jakob (1965) "The Egyptian Tenses," *The Proceeding of the Israel Academy of Science and Humanities* 2/5: 1-26.

Potter, Beatrix (2002) *The tale of Peter Rabbit,* the original and authorized edition. London: Frederick Warne.

――― (2005) *The tale of Peter Rabbit*. Hieroglyph edition. Translated by Nunn, John F., Parkinson, Richard B. London: The British Museum Press.

ポター, ビアトリクス (1971)『ピーターラビットのおはなし』(いしいももこ訳) 福音舘書店.

――― (2002)『ピーターラビットのおはなし』(いしいももこ訳) 福音舘書店.

Taylor, Judy (1987) *That naughty rabbit: Beatrix Potter and Peter Rabbit*. London: Frederick Warne.

Taylor, Judy ed. (1989) *Beatrix Potter's letters*. London: Frederick Warne.

Taylor, Judy, Whalley, Joyce Irene, Hobbs, Anne Stevenson, Battrick, Elizabeth M. (1987) *Beatrix Potter 1866-1943: The artist and her world*. London: The National Trust.

横田順子 (2004)「絵手紙から絵本へ：『ピーターラビットのおはなし』と『りすのナトキンのおはなし』」『英米文学論叢』(大東文化大学設立 80 周年記念ビアトリクス・ポター特集) 35: 1-18. 大東文化大学英米文学会.

吉田新一 (1994)『ピーターラビットの世界』日本エディタースクール出版部.

――― (2002)「ビアトリクスポターの絵画の秘密：同時代の絵画から批判的学習をする」『美術の窓』21/11(233): 24-25. 生活の友社.